

全日本リレーの失敗と積年のリベンジとして臨んだ関東学連リレー。二つのリレーに挟まれたこの二ヶ月は、運営面でも激動の時間だった。その激動すら、来るべき大揺れの初期微動に過ぎないのかもしれない。

思いから結果へ

12月6日

全日本リレーに出かけるまえに東京で第二回スキー0実行委員会を仕切る。ブリテン3は期限通りに発行できそうだし、懸案事項は少しづつ片付いていく。コースプランナーの高島が来週、またIT部門の的場が1月にはルズツを訪れる。これでめどが立つだろう。役員配置については、限られた予算の中ではまだ精査が必要だ。三重に向かう新幹線の中ではひたすら原稿書き。この忙しさは死んでも直らないな。

夜のミーティングでは、チームリーダーの田濃が「村越さんが、このメンバー表を見て『きっと上がねえだろうと言うだろうな』、と思いながら、僕も『妄想』を描いてます」と語っていた。

12月7日:全日本リレー当日

1走の和久田はトップと2分という絶好の位置で帰ってきた。どこかでトップに追いつくレース展開をイメージしながら走り出す。3までは無難にクリアしたものの、4に向かう尾根から沢への乗り換えで失敗した。おりた時にすぐ左をみればミスに気づいたかもしれないが、視野が狭くて、気づかずにそのまま下った。リロケートはすぐにできたが、復帰時に、またしてもミスをした。二度目のミスのダメージは大きかった。せっかく作ってもらった格好の舞台が台無しだ。

リレーでなければ止めていただろう。ところが4番に着くと、すぐ前を出て追い抜いたはずの滋賀とともに、トップ茨城がいる！後ろから抜かれた気配はない。ここでだいぶ復活した。

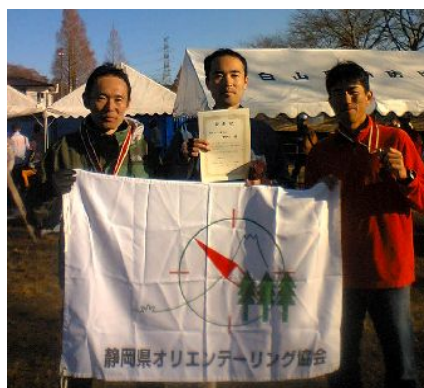
ビジュアルではトップに出、そのままトップでゴールしたが、2位の埼玉には結局1分追いつかれていた。3走高橋では、田濃も冷静に抜かれるしか



▲関東学連リレーOB戦。現役時代を思い出させる、「悲願」の優勝。左から鹿島田、村越、加藤

ない。最後に神奈川に抜かれた。それでも久しぶりの3位入賞だ。

今回は僕が静岡の3人の中で一番遅かった。まともに走っても1位は難しかったが、田濃の「妄想」が、決してそうではないことを体験させてやれただろう。田濃は、年明けから「今年は今全日本リレーを走りたい」と練習を続けたという。「妄想」に向けて努力を惜しまないチームメイトを持って誇りに思う。



▲3位は静岡男子としては久しぶり。まさにチームワークの賜

トレランへの長く遠い道のり

12月8日

レースだけでなく、身体もぼろぼろになっていた。左脚のつけねの靭帯が痛み、前屈ができない。10-11月の長距離のトレーニングの影響だろう。出勤前になじみの接骨院へ。「少しかかるかもしれませんがね」と言われた。

警察からトレイルランニングの道路

使用許可をもらうため、石原を使いに出した。しかし、トレラン経験のない「小娘」(自称)を使いに出したのが間違いだった。担当課にたどり着くまでに警察構内で4回も咎められ、やっとたどり着いた道路管理係から質問攻めにあつた後、最後には膨大な宿題をもらって帰ってきた。翌日の石原の第一声は、「このイベント、開けないと思います…」。たった9kmとたかをくくっていたトレランは、スタート前から長い道のりだった。

翌日、宮内を呼んだ。アドベンチャーレース運営経験のある彼女なら、この道のりを乗り越えられるだろう。宮内は石原とその日の午前指定されたところを全て周り、資料を整理し、立派な「書類の束」を作り上げた。後は現地の写真を撮れば、書類を提出できる。二人が研究室で楽しそうに図面づくりをしているのを見ると、「できないこと」の多くは心理的な壁なのだと思う。トレランミニレースへの長い道のりは少しづつ克服されはじめた。

12月13日

今週末はJOAの委員長会議と理事会である。最近の疲れた身体と頭で無事に乗り切れるだろうか。走れない分、静岡駅まで自転車で出かけ、そこから新幹線で東京に向かう。



▲JOA理事会の裏では、トレイル協会設立総会が行われていた。

■エール

12月17日

軽く走ると、今度は左の骨盤深部に鈍い痛みあり。我慢できないものではないが、自重しよう。翌日のJR大人の休日倶楽部の読図講習最終回の屋外実技のために、田中家に世話になった。田中さんは、スキー0のセレモニー担当も快諾してくれた。これで懸案も一つ解決に向かった。

12月18日

大人の休日倶楽部で山歩き。6時間。講習開始すぐに20人のクラスを二つまとめて実技をしたのは失敗だったと気づいた。しかし、JR側の評価も、参加者の評価も悪くなかった。アシスタントに感謝。

帰ってくると新潟から洋なしが送られていた。農園を経営している送り主Nさんと出会ったのは、僕がオリエンテーリングを始めたばかりのころだった。当時既に少壮のオリエンティアだった彼は、当時からユニークな活動をしていた。まだMTB-Oもないころから独自にMTBを使ったオリエンテーリングをしていた。

僕が一人前のオリエンテーリング競技者になったころ、彼から一度だけ「村越さん、いつか新潟に」と言われたことがあった。当時の新潟に行く理由は何もなかったが、いつかは新潟に行ってみたいという思いが頭の片隅には常にあった。

1990年代に入り、静大でのコーチングに初めて行き詰まりを感じたころ、パソコン通信で知り合った新潟大学の学生に合宿を「押し売り」したところ、すかさず「買ってくれた」。メールの文面から彼らの熱意を感じたことはもちろんだが、Nさんの言葉が後押しをしてくれたことは間違いない。Nさんは仕事の合間に合宿を訪問してくれた。約束をした訳ではないのに、彼に対する約束を果たした気がした。

それから15年以上の間彼とは一度も会っていないが、毎年律儀に洋なしが送られてくる。それは僕に対するエールのように思える。



▲JR趣味のクラブ読図講習で副主任講師を務めた高梨善徳(左)。自分のスキルを社会に還元する喜びを感じたという。

12月19日

昨日で今年の授業も終わった。朝一で日赤に行き、クスリを処方してもらう。僕の現在の主治医は非常勤で、金曜日だけでも30名以上の患者を診ている。精神科医の香山リカに言わせると、「まともな精神科医はたいいてい精神の不調に陥る」のだそうだ。僕のような患者はさっさと消えるべきだな。その後警察にいてトレランのための道路使用許可を提出。ちょっと修正をして受理された。長い道のりであった。

明日が4週間ぶりの予定のない休日というのが救い。この2ヶ月、よくがんばった。

12月20日

久しぶりの朝寝。ゆっくり朝食をとり、ロゲイニングの写真を撮りながら3時間半かけて大学へ。いつも走ったりMTBに乗っているはずなのに、またしても魅力的な場所を発見した。最高峰の有度山にも初登頂。初登頂と言いたくなるような場所だった。

12月21日

岐阜県オリエンテーリング協会が地元山岳団体とコラボで登山・ハイキングの指導者向けの読図講習会を開催し、そこに講師として呼ばれた。山の経験者が多いので、資料も気合いを入れて包括的なものを用意した。昨年から関わっている冬山登山での事故もあって、文部科学省の登山研修所では現在講習内容の明確化と標準化を図っている。今手がけているカリキュラムが日本のデファクト・スタンダードになる日も遠くない。

こういうイベントが定着し、他のアウトドア活動との接点が広がれば、オリエンテーリングはもっと幅広く、奥深いものになる。そこからは与えるものと同じくらい得るものがあるはずだ。

■パラダイス、香港

12月25日

ゼミ・会議の後、羽田に向かう。疲労の極致にあったが、行き先が香港というのが救いだった。僕をよく理解し、尊重してくれる仲間たち、おいしい料理にマッサージ。疲れた今こそ訪れる場所、それが香港だ。空港へはロウ・ラウが迎えに来てくれた。

12月26日

ユースキャンプに合流した。日本からの参加者は3人と少なかったのは残念だったが、皆楽しそうだった。この日は最後の夜なので、街のレストランにでかけて夕食をとった。香港連盟会長のCKも参加していた。

30年前14歳だった僕が、全日本チャンピオンになるなんて誰も想像しなかっただろう。最初に全日本選手権を取った時ですらその後21回も選手権者になり、世界選手権に四半世紀も出場し、IOFの理事になるなんて、僕も含めて誰一人想像できなかっただろう。若者にはどんな夢も開かれている。20年後にこの位置に立って、若いオリエンティアたちに話しかけているのは君たちの誰かかもしれないのだという言葉を彼らに贈った。

12月27日

香港の仲間とともにフェリーで広州南部の南沙にやってきた。

28日はミドル競技。トレインは急斜面で、そのほとんどはライチ林である。今日のミドルは6km超で、タイムが78分。重力場が歪んでいるのではないかと思うほど遅かった。もともと、このトレインには誰もが苦戦したようで、パンケットの時に結果を聞いてみると、4位だった。21Eなので13億分の4だ。中国に帰化できたら、まだまだ世界選手権には出れるかもしれない。あと一歩で表彰台だと思ふと欲が出る。

林やロードで見る中国のエリートのは速度は驚くほど速いから、テクニックを磨けば彼らの伸びしろは大きいはずだ。実際女子は今年の世界選手権では7位になっている。表彰台まであと一歩なのだ。

レース途中で地図交換があったが、前半は1:10000、後半が1:7500。そんなこと前日のテクミでも聞いてない。スタート前になぜか知っていたペローラが教えてくれた。スタートも11:28のはずが、11:32ごろになっていた。地図やコントロール位置にはほぼ問題なかったが、運営の洗練度は低い。日本が70年代後半の比較的短い期間で洗練された運営が可能になったことは、明治初期の近代化に並ぶ奇跡だろう。

12月29日

スプリントイベントは、南沙の公園

で行なわれた。パークOにはうってつけの公園だが、日本ほど管理が厳しくない。花壇じゃないのと思われる場所も、地図では黄緑には塗られておらず、選手が踏みつけて走っていく。左脚は心配だったが、特に痛みもなく走り切れた。むしろレース後の方が調子がいまいちだった。久しぶりのスピードレースを楽しむ。脚の速い中国選手に対して対トップから2分ならまずまずの結果だろう。

相変わらず大会とその周辺イベントの全体像は分からない。この日は、プログラムによれば昼食も夕食も臨海酒家で提供されるはずだったが、同行している香港チームに聞いたら、いずれも自分たちの宿舎の食堂で提供されるという。じゃあ、今日はのんびりだ。14時には部屋に落ちていて、シャワーを浴びた後、たっぷり1時間昼寝をし終わったところにフロントから電話があった。「地域の行政の招待で宴会があるから、17時に車が迎えに来る」という。洗練された中華料理を堪能。

最終日は100mオリエンテーリング初体験である。公園などのおよそ100m四方の場所に柵が設けられ、そこかしこに置かれたコントロールの中で正しいコントロールを採りながら回る。地図のスケールは1:750。男子エリートの場合、8人4組の予選があり、各組4名が準決勝に進める。2組の準決勝の上位4名づつが決勝に進める。各組の選手はいずれも同時スタートなので、上位だと分かるれば、最後は流しながらゴールする。

男子エリートは見ていると迫力がある。スケートのショートトラックのような、コントロール周りのバトルがそこかしこで見られる。運やゲーム的要素が強いとは言え、初心者にとってもエリートにとっても整置の練習にはうってつけだ。何より普段のオリエンテーリングではない闘争心の練習にもなる。



▲100m オリエンテーリングの地図と、その競技風景。スケートのショートトラックを見ているような迫力だ。

■香港アウトドア事情

12月30日

30日の夜は旧友のパトリックと食事をした。2月末に行なうロゲイニングの準備で忙しく、中国と一緒にいけなかった代わりに、夕ご飯をごちそうしてくれた。話は必然的にロゲイニングやトレイルランニングの話になる。

日本同様、香港でもトレイルランニングは人気らしい、先日彼らが出た30kmのレースは参加が3000人。ロードの後トレイルに入ると、そこで30分もの渋滞が発生するあたりも日本と事情は変わらない。

ロゲイニングにも600人ほどの参加者がある。24時間ロゲイニングは準備が大変なので2年おきなのだそうだが、それ以外の年も8時間ロゲイニングは毎年行なっている。

香港というとショッピングや中華料理、高層ビルというイメージが強いが、実は地域の30%を超える場所が自然公園に指定されている。ハイキングも盛んだ。オリエンテーリングも前から中高生のレベルでは多くの活動者がいるが、それ以上の年齢の参加が少ない。ロゲイニングでは、より長距離を移動できる、読図がオリエンテーリングほど難しくないといい理由から、オリエンテーリング以外の参加者が2/3を占める。この比率に至るまで日本に似ているのが面白い。

31日の午前中は足つぼマッサージと全身マッサージに行った。2年前にいった店は見つからなかったが、街を歩いているうちに、歩いてすぐのモンコックにマッサージ屋があるのを発見した。全身が1時間で200香港ドル(2500円くらい)、足つぼが45分で88ドル。どうせ暇なので、両方うけた。全身マッサージは愛想も全くない小太りのおじさんと少々がっかりしたが、腕は確かだった。マッサージというよりはかなりきつめの按摩だったが、ツボをほとんど外さなかった。積年の首から頭にかけてのコリもすっきりした。

マッサージが終わってほぼ正午。深夜便の帰国なので、時間はたっぷりある。空港のあるランタオ島のランタオピークに行くことにした。空港までいって荷物を預けて、登山道の入り口までタクシーで。そこから山頂までは直線距離で2kmくらいしかないが、標高差は約900m。まあ静岡の竜爪山に登るようなものだ。

13:30に登山道入り口を出て、伯公峠まで40分。さらに約40分で山頂に。途中、外国人3人とすれちがう。山頂は風が強く、霞んでいて、パンを1個食べて早々に出発。最近大仏とケーブルカーができて有名になったニョンピン(昂坪)を通過した。ケーブルカーに沿ってハイキング道があるが、それは面白くないので、遠回りをして海岸沿いにひなびた集落と思しきあたりを通ることにした。そのルートを選んだのが運の尽き。山頂からの出だしが獣道のように怪しかったのだが、白いテープで誘導してあったので、よもや途中でなくなるだろうとは思わずたどった。実際白い誘導テープは最後まで続いていたのだが、標高300mあたりからガレ沢に入ってしまった。生命の危険を感じる場所はなかったが、ところどころ岩が滑(ナメ)状になっていて、往生した。かといって、周囲はジャングルのような藪で、沢を外れられない。こんなところでケガして動けなくなったら、しばらく誰も見つけてくれないだろう。道に迷って滝に出てしまった登山者の気持ちはこんなものだろうか。

ガレ沢と格闘50分。なんとか海岸沿いの集落をめぐる徒歩道に出てきた。後は、4kmほど走って東涌(ツンチャン)に帰るだけ。ひなびた農村風景のすぐ向こうに最新の空港が見える不思議な眺めだ。

一日で、マッサージからトレイルランまで香港を満喫!

■有度山トレイル三昧

2009年1月4日

正月に暴飲暴食をしたわけでもないのに、朝からひどい下痢。やや熱もある。結局朝から食べられたのはゼリー2袋。夕食でようやく崩したジャガイモが食べられた。頭は痛くないので、ひたすら原稿書き。

1月5日

体調不良はなんとか回復した。さすがに昨日は一日中家に居てゆっくりしたので、朝の目覚めはよい。警察にいらって道路使用許可証をもらい、その後ロゲイニングの最後の写真をとって、夕方までは大学でがつつり仕事。

1月9日

新しいイベントはワクワクもするがドキドキもする。ロゲイニングに失敗があろうはずはないが、トレランでちゃんと誘導できるのかはやってみないと分からない。緊張でやや寝不足。朝には宮内がやってきて、残った仕事をいくつか片付けてくれた。朝からの冷たい雨が若干小降りになった午後からようやく誘導テープの設置を始めた。僕はロゲイニングのフラッグCPの設置に出かける。

1月10日

昨日の天気から一変して、穏やかな晴天になった。人気のトレランは参加が約120人。シリーズ戦のため東京から大挙して人が集まったロゲイニングが180名。静岡はまだまだトレラン後進県だ。そんな人数だが、トレランの参加者は山岳耐久での上位の常連、地元静岡の望月さんと相馬さん、横山さん、渡辺千春さんなど、新年早々おめでたい感じ(相馬さん談)だ。渡辺さんは今回も柳下と翌日のロゲイニングにも参加する。



▲トレランの日の夜は宮内、横山、相馬、望月の「濃い」メンバーで茶話会。これだけごつそうな男が集まってだれ一人飲まなかった。

翌日の有度山ロゲイニングは、準備の一番重要な時期があまりにも忙しく、しかもトレランの準備にエネルギーを吸い取られて、凡ミスをいくつも出してしまった。まず磁北線を引き忘れていた。参加者に配ってからCP29の写真の忘れていたことを指摘された。これまでなら無意識に制御していた部分だ。地図の出来も、等高線の発色が今一つだった。これは分かっていたことだが、技術的にクリアするだけの余裕がなかった。

レースが始まってからも、中島君がなかなかポイントにたどりつけなかったりで、やきもきした。そのことに気を取られながら携帯の受信状況を確認するために117番に電話するつもりが119番にワン切りしてしまった。丁寧なことに、向こうから大丈夫かどうかの確認があって、恐縮した。

参加者の人には有度山の自然を十分に堪能してもらえたようだ。参加したト

レイルランナーたちの評判もよかった。オリエンテリングの間口を広げるヒントがここにありそうだ。詳しくは木村君のレポート参照。



富士山をバックに走るマッパ(田中・竹内)



スタートと同時に動き出すチームもいれば、どっかり座って作戦を練るチームもいる。この多様性がロゲイニングの魅力だ。

1月12日

夕方、フラッグ撤収をかねて有度山へ20kmのランニング。気持ちは来年度のロゲイニング大会に向かっていった。

1月16日

センター入試の監督のため、富士へ。大学では独自の会場での試験も行なうが、それでは足りず公立高校を借りて試験を行なっている。それらの会場では大学と高校の先生が二人組で試験監督を行なうが、複数監督が前提のセンター試験では、二人組では全く休みがとれない。受験生にも試練だが、二日間できることと言えば、試験問題を解くだけというのも辛い。毎年入試センターには、「監督官が居眠りをしていびきがうるさかった」という苦情が数件寄せられる。

辛い仕事には付加価値をつける。16日の打ち合わせの後は、宮内と待ち合わせて公園でヘッドランプをつけてクロカン練習。その後、富士宮名物のお好み焼きと焼きそばデート。

1月23日

授業が本格的に始まり、次々と仕事に追われる週が始まった。それも2週間の辛抱だ。それにしても週の中日に東京で講習があって、その後ゆめ基金の打ち合わせをし、翌日はヘビーな授業を二コマ終えたあと、速攻で滋賀に行き前泊、週末はディレクター講習会。いきつくところまでいくぜって気分だな。

1月24日

滋賀でディレクター2級の講習。20時間の講義と演習を2日間につめたので、初日は9時、二日目は8時15分から夕方18時近くまでのハード講習である。それでも今回は7名のフル参加者にコマ単位の研修者を加えて、有意義な講習となった。手練れの運営者でもある受講者たちのポジティブな姿勢には勇気づけられる。関西に来ると元気がでる。

1月27日

イベントは集まる時期に集まるものだ。滋賀の講習から帰って1日おいた27日は、評議員を務める近くの学校の学校評価に参加した後、卒論発表会に出て、そのまま東京で登山研修所の冬山研修会安全検討委員会に出席。ナビゲーションについては、概ね意見が採用されたが、まだまだ勉強しなければならぬことがたくさんある。

■リベンジ

1月29日

富士山研究の中間報告会。焦って中間成果を仕上げたが、なんだろうが一番具体的に進んでいるじゃないか。月末に向けての修羅場も、先が見えた。

忙しいが、トレーニングも欠かせない。今週末の関東学連リレーOB戦に向けて最後の調整をしないとね。このリレーにOBの部が出来て以来、東大OBは毎年優勝を狙っているのだが、未だかつて実現したことがない。「最後のチャンス。」そう言い聞かせて、短い時間の中で調整主体のトレーニングをする。

土曜日、大学で1月末締め切りの原稿を仕上げた後、念のため針をうちにいく。8日に来たときよりもずっとよくなっているとの診断。身体のバランスが崩れたのか、やや不調感が出る。

2月1日

関東学連リレーOB戦。昨晩は目が冴えて、眠りも浅かった。「甘えを断ち切る」ために3走を志願した。1走の加藤が最速タイムで後続を離れた後も2走鹿島田が容赦なくタイムを広げる。結局その貯金で勝たせてもらった。悲願の優勝。レース直後は「カッシーの+6%だからよくやったよね」と思ったが、ラップを見るとミスもロスも多い。一つのリベンジが終わると、また新たなリベンジのタネが見つかる。

(村越 真)